

I プタクロール粒剤 2. 5

1. 背景とねらい

従来のプタクロール粒剤 5 の成分量を半減したプタクロール粒剤 2. 5 は、処理時期や中期除草剤との組み合わせを適切に行うことによって初期除草剤として効果が高く、水稲に対しても安全で、しかも低コストで使用できることが確認され、環境保全にも有効であるので参考に供する。

2. 技術の内容

- (1) 除草剤名等 商品名: マーシエット粒剤 2. 5
 試験薬剤名: プタクロール粒剤 2. 5 (CP-53619)
 成分: プタクロール 2. 5%
 毒性、魚毒性: 普通物、B類

(2) 除草剤の特性

プタクロールは非ホルモン系吸収移行型の成分で主として雑草の発芽時の幼芽部から、一部は根から吸収されタンパク質の合成を阻害し、雑草を枯殺する。土壌粒子への吸着は強く、土壌中の移動性は小さいため残効期間はおよそ 20~30 日程度である。ノビエ、カヤツリグサ、マツバイに卓効を示し、その他の草種にも雑草の発生まえから始期の処理で高い除草効果を示す。しかしウリカワ、ヒルムシロには防除効果は劣る。従来のプタクロール粒剤 5 に対し、低温時の移植前処理や漏水田でも安全性が高まっており、砂壤土~埴土まで使用できる。

(3) 使用方法

雑草発生前までの植代後~移植前 4 日までの処理時期とし、中期除草剤もホタルイに効果の高い薬剤を早めに使用する必要がある。又一発処理剤の補正処理剤としても効果が高い。

(4) 使用基準

区分	処理法	使用時期	使用量	適用土壌、地帯	適用雑草
移植水稲	移植前 土壌処理	植代後~ 移植前 4 日	3 kg /10a	砂壤土~埴土 減水深 2cm/日以下 全県下	1 年生雑草 マツバイ ホタルイ

3. 指導上の留意点

- (1) 散布後、かけ流しや田面を露出させないようにする。
 (2) 田面を均平にし、極端な浅植えにならないようにする。
 (3) 中期除草剤は多年生雑草に効果の高い除草剤を早めに使用する。
 (4) 一発処理剤と組み合わせて使用する場合は、プタクロールを含む薬剤との体系使用はしない。
 (5) ウリカワ、ヒルムシロには除草効果は劣り、コナギ、ミズガヤツリにはやや劣る。

4. 参考資料

- (1) 岩手農試県南分場 水稲関係除草剤試験成績書 1973,1985,1986
- (2) 岩手農試技術部 同上 1986
- (3) 日植調東北支部 日植調研究協会東北支部会報 20号
- (4) 農文協 農業便覧 第4版
- (5) 岩手県、県植防 除草剤展示圃成績書 1985,1986
- (6) 山形農試 異常低温、水稲不良条件下での安全性試験 1977

5. 試験成績

表1 農試試験成績

年次	試験場所	区名		除草効果(無除草比%)										葉害		
		No. 除草剤名	処理時期(日)	処理量(g/a)	ノビエ	1年生雑草	マツバイ	ホタルイ	ヘラオモダカ	ウリカワ	オモダカ	ミスガヤツリ	ヒルムシロ	合計	症状	程度
48	県南分場	1. 7700-1 2.5	-2	300	0	7	0	20	44	-	-	-	-	3	無	-
		2. "	0	300	0	t	0	21	37	-	-	-	-	1	無	-
		3. "	+3	300	0	0	0	44	15	-	-	-	-	2	無	-
		4. 比) CNP	-2	300	6	24	33	84	59	-	-	-	-	13	無	-
60	県南分場	1. 7700-1 2.5→B-3015SM	+0,+25	300,300	0	0	t	60	0	40	0	7	-	19	無	-
		2. "	+0,+25	300,300	t	0	0	46	0	45	0	32	-	27	無	-
		3. 比) 7700-1 5.0→B-3015SM	+0,+25	300,300	0	t	1	20	0	17	0	4	-	7	無	-
61	本場	1. 7700-1 2.5	-5	300	1	t	0	33	t	-	-	0	-	2	生育抑制	微
		2. "	0	300	t	t	0	0	t	-	-	0	-	t	無	-
		3. 比) MTS-1	-5	300	6	11	0	33	t	-	-	0	-	7	無	-
	県南分場	1. 7700-1 2.5→MT-CGL	-4,+5	300,300	t	t	0	3	0	64	0	19	-	2	無	-
		2. "	-4,+15	300,300	t	t	0	4	0	456	7	13	-	5	無	-
		3. 比) MTCGL	+5	300,300	t	t	0	4	0	456	51	1	-	5	無	-

t : trace